コラム　西洋古代史の泉　12

ローマ化とラテン語

南　川　高　志

ローマ帝政前期に活躍した元老院議員で歴史家のタキトゥスは、妻の父の生涯を『アグリコラ』（98 年公刊）で記す中で、属州ブリタンニア総督としての事績を詳しく記述しているが、第 21 章で次のように述べている。

> このあとに続いた冬（78 ～ 79 年）は、公共福祉の面での構想を実現するために費やされた。この地方の人々は、てんでに散らばって住み、粗野な生活を営んでいるためにすぐ手軽に戦争を起す気持ちになる。こうした民族を快適な生活を通じて、平和と憩いになじませようと、あるいは個人的に説得しあるいは公的に援助したりして、神殿や市場や家を建てさせた。張り切っている者らを奨励し怠けている者らを叱正した。こうして彼らは褒賞を目ざして張り合ったので、こちらが強制する必要もなくなった。
>
> さらにアグリコラは酋長の子弟に教養学科を学ばせ、資性に磨きをかけ、「ブリタンニアの人たちの才能は、ガリアの人たちの熱意よりも高く評価される」とおだてたものである。その結果、いままでローマ人の言葉・ラテン語を拒否していた人まで、ローマの雄弁術を熱心に学び始めた。こんな風にしてローマの服装すら尊重されるようになり市民服が流行した。そして次第に横道にそれだし悪徳へと人を誘うもの、たとえば逍遥柱廊、浴場、優雅な饗宴に耽った。これを何も知らない原住民は、文明開化と呼んでいたが、じつは奴隷化を示す一つの特色でしかなかった。（國原吉之助訳）[1)]

この箇所は、ローマ人が統治下のブリテン島先住民にローマ風生活様式を伝えようとしている箇所として夙に有名であり、「ローマ化のカタログ」と呼ばれてきた記述である。ローマ帝国の支配の下で領域内の各地にこのようにローマ風の文化や生活様式が伝播していったことを、歴史家は「ローマ化」（英語であれば Romanization）と呼んできた。そして、この「ローマ化」については、概念が確立された 20 世紀初めのイギリスの状況、とくにイギリス帝国の世界支配に影響されており、「帝国主義的言説」であると、20 世紀末より考古学者たちに厳しく批判されるようになった。こうした学界の動向について、私は拙著『海のかなたのローマ帝国』（岩波書店、2003 年）などで紹介したが、2015 年に拙著の増補新版を出版す

る際、ローマ化問題のその後の議論について補うことはできなかった。

「ローマ化」批判後の一番ホットな議論は、「グローバル化」概念のローマ世界への適用如何という問題であろう。これについては、本誌前年度号の同じコラムで簡単に触れた。ただ、今の私は、現代世界について語られる概念を古代に適用できるか否かの問題よりも、「ローマ化」概念を用いずにローマ帝国の世界支配の意義をどのように語ることができるのか、そちらの問題のほうが重要だと感じている。

ところで、「ローマ化」概念批判を展開した考古学者たちの書物や論文は数多いが、「ローマ化」の議論に実質的な影響を与えた歴史学者の研究書をあげるとすれば、それは間違いなく Greg Woolf, *Becoming Roman: the Origins of Provincial Civilization in Gaul* [2] ではないかと私は考える。この書物は、紀元前 1 世紀から後 1 世紀のガリアにおいて、住民上層部が同化され「ローマ人になる」過程を描き出したものである。20 世紀末の 1998 年に出された作品だが、'Becoming Roman' やそれに類する表現は、その後書物や論文の題名としてしばしば用いられてきた[3]。

ウルフは、「ローマ化」は退け、ガリア人が自分たちのアイデンティティを失わず、人々は先住者の伝来の文化とローマの文化との間で行き来したと理解しようとしている。同時に、「上層住民」、属州エリートの役割と位置づけを明確にした。いわゆるローカル・エリートがローマ帝国の文化を採用するか否かで積極的に行動し得たとする見解は、ウルフの書以前にマーティン・ミレット[4] らによって提示されてきたが、ウルフの書物を契機に、21 世紀にはいると在地のエリート層の機能を重視することが当然となったかに見える。

よく知られているように、最盛期のローマ帝国の統治は、中央政府から送り出された役人（官僚？）の数が極めて少なく[5]、征服後のローマの統治は味方をした在地の有力者を通じて行っていた。ローマ帝国は帝国各地の都市や部族国家の首長を支配の「共犯」（Ch. ケリー）に組み込んだのである。冒頭に引用したタキトゥスの文章に見えるように、属州総督が「教養学科」を学ばせたのは「酋長の子弟」であった。しかし、現在の学界では、都市や部族の有力者がローマの権威を笠に着て支配し、一般住民は抑圧された状況にあったとは理解されていない。統治の単位となった都市の内部の政治力学は複雑であることが、とくに帝国東半のギリシア人都市の解析から明らかになっている[6]。帝国支配の力学関係は、征服者と被征服者の間だけではなく、非征服地の都市や都市有力者、そして部族社会の内にあったことが十分認識されるようになったのである。

こうした研究状況の中で、帝国支配とともに広がるようになった「ローマの」文化が、各地でどのような性格のものとして機能したかについても議論がなされている。「ローマ化」批判の急先鋒で、「グローバル化」概念の適用主導者でもある英国ダラム大学考古学教授のリチャード・ヒングリは、2013 年の「ローマ帝国主義」入

門書に寄稿した論文[7]で、ローマ文化の持つ「包摂」的な性格と「排除」の性格を説明している。2005年刊行のエンマ・デンチの書[8]に依拠して、ローマの「帝国文化」は「包摂」（同化）と「排除」（周縁化）の性格を持っていたことを強調するのである。興味深いことに、その包摂と排除の分かれ目にあるのが、ラテン語を使えるかどうかだ、という。学校でラテン語を勉強したことのある者なら誰でもわかるだろうが、この言語の教育がまだ手ほどきを受けていない者を招き入れようとする願望でもって必ずしも動機づけられていたわけではない、と書き、最近までラテン語文法や標準的なラテン語テクストについての知識が、西洋社会において地位や権力を得るための手段となっていた、と振り返る。そして、ラテン語はガリア北部のバタウィ族まで含む西ヨーロッパに広がったローマの強力な「包摂」の文化の一要素であると述べる。と同時に、ラテン語のために用意された文法規則・規範は手ほどきを受けない者や招かれざる者を「排除」する役割も果たしたと指摘する。

実際、社会移動が可能だったローマ社会では、ラテン語に縁がなかった地域の人々も、補助軍勤務などを経てラテン語を学ぶことができた。ローマ属州ブリテン島の北辺から出土したウィンドランダ木板文書には、ガリア北部から派遣されていた上記のバタウィ族出の補助軍兵士が書いたラテン語を見ることができる。木板に書かれたその筆跡は、私には到底解読できない、いわゆる「ミミズが這った」ような代物で、アラン・ボーマンらの校訂テクストに頼るしかないが、このような書きぶりであっても、この言葉の広がり方は驚くほど力強いことに感心する[9]。ラテン語は単にローマ人として生きるためだけでなく、社会的エリートとしての生き方をするために必須であった。冒頭のタキトゥス『アグリコラ』の一節には、先住者たちがラテン語をだけでなく弁論術まで習う様子が書かれている。そもそも属州の都市の領域の至る所には、ラテン語で刻まれた碑銘や墓碑が建てられていた。

しかし、エリートでなければ修辞学の知識は必要ではなく、在地の人々が田園地帯で伝統的な生き方をするには、ラテン語は必ずしも必要なかったといえるかもしれない。上に、補助軍の兵士となった先住者たちが軍隊勤務を通じてラテン語を学ぶことができたと書いたが、軍団兵の供給が陣営近くの兵士の家族からなされるようになると、そことは縁が薄い属州の住民は次第に「ローマの文化」から切り離されていく傾向にあったとも指摘されている[10]。

ラテン語が属州の社会でどのような力、効果を持ち得たか、これは難しい問題である。西洋世界においてラテン語が有した役割についてはすでに数多くの研究がなされてきている[11]。上記のヒングリの指摘はそれを受けたものである。また、ローマ化の問題とラテン語の意義についても、2001年にグラスゴーで開催されたローマ考古学会大会で議論され、すでに論集が刊行されている[12]。さらに、1990年代初めの学界で熱心に議論されたリテラシーの問題も想い起こされる。古代ギリシ

ア・ローマ時代のリテラシーをどう考えるかで、かなり識字率が高いとみる解釈と極めて低いとする解釈が対立したのである[13]。その際、注意すべきこととして私が記憶しているのは、とくにローマ帝国でのリテラシーを考える際、ギリシア語とラテン語だけを検討したのではいけないということであった。帝国内では、古代の終わりに至るまで、ラテン語とギリシア語以外の実に様々な言語が使われ続けていたからである。果たしてラテン語はどのような役割を果たしたのであろうか。ラテン語は帝国の住民を区別（差別）し、包摂か排斥かいずれかを決める強い要素になったのか否か、新しい観点から見直すべき課題であろう[14]。

ローマ帝国には多様な人々が暮らしていた。われわれが問題にしなければならないのは、ローマ帝国という巨大な統治組織が実質的にこの多様な人々の生き方を変えたか、少なくとも影響を及ぼしたかどうかである。ラテン語というローマ人の元来の言語の使用と意義とを私たちは自明のこととしてきたかもしれない。見直すべきは、ラテン語の言語として役割ばかりではない。今日残されている、この言語で書かれたすこぶるイデオロギー的性格の強い文章が、実際のローマ帝国の実態を反映しているか否かが問われねばならない。

私は学生時代、ラテン語の勉強に苦しんだが、ヒングリの上記の記述とは違う性格の教育を受けた。私が学部学生の時に初級から読み物、作文や作詩までラテン語を習った先生は、ラテン語で詩を書く詩人であった。先生の教育の目的は、日本人のラテン詩人を増やそうとするものではなかったかと思う。そもそもラテン語を習得しても、日本ではとくに高い社会的地位に就けるわけではない。ラテン語は「包摂」「排除」のメルクマールではないのである。ただ、「グローバル化」（アメリカ化？）の今日、時に「英語帝国主義」という言葉も聞かれるように、英語がローマ帝国時代のラテン語の位置にあるのではと感じることがある。外国出張するとき、私はラテン語を習得していない属州先住民の苦しみを、実感を持って理解するからである。

ところで、今夏 17 年ぶりにダラム大学でヒングリ教授に会ったときに、意見交換の後で私は大事な質問するのを忘れた。「学校でのラテン語授業は楽しかったですか。」

注

1）ちくま学芸文庫、筑摩書房、1996 年より引用。

2）Cambridge University Press, 1998.

3）例えば、A.E.Cooley（ed.）, *Becoming Roman, Writing Latin? : Literacy and Epigraphy in the Roman West*, JRA Supplementary Series Nr. 48, 2002 ; Louise Revell, *Ways of Being Roman : Discourses of Identity in the Roman West*, Oxbow Books, 2016 など。

4）M. Millett, *The Romanization of Britain: an Essay in Archaeological Interpretation*, Cambridge University Press, 1994.

5）詳細は、新保良明『古代ローマの帝国官僚と行政―小さな政府と都市―』ミネルヴァ書房、2016 年参照。

6）増永理考「ローマ元首政期小アジアにおける見世物と都市―アフロディシアスの事例を中心として―」『史林』98 巻 2 号、2015 年などを参照。

7）R. Hingley, Exploitation and Assimilation: the Western Roman Empire from Augustus to Trajan, D. Hoyos ed., *A Companion to Roman Imperialism*, Brill, 2013, pp. 265-276.

8）E. Dench, *Romulus's Asylum: Roman Identities from the Age of Alexander to the Age of Hadrian*, Oxford University Press, 2005.

9）拙著『海のかなたのローマ帝国』岩波書店、2003 年、増補新版、2015 年の第 5 章を参照。

10）P. Garnsey and R. Saller（eds.）, *The Roman Empire: Economy, Society and Culture,* Bloomsbury, 2014, p. 221.

11）F. Waquet（trans. By J. Howe）, *Latin or the Empire of Sign: from the Sixteenth to the Twentieth Centuries,* Verso, 2001 など。

12）A.E.Cooley 編のこの論文集（註 3 記載）には、G・ウルフも寄稿している。

13）W. Harris, *Ancient Literacy,* Harvard University Press, 1989 から始まる論争であり、ローマ史については論集も出された。*Literacy in the Roman World,* JRA Supplementary Series Nr. 3, 1991.

14）わが国学界では、志内一興氏の先駆的な研究が参考になる。志内一興「ラ・グローフザンクの陶工文書―ラテン語とガリア語の接触について―」豊田浩志編『神は細部に宿り給う』南窓社、2008 年、65-88 ページ。

＊本小稿の一部は、JSPS 科研費 18K01028 の助成を受けたものです。